

茨城大学地域活性化プロジェクトチーム 「さとみ・あい」

ボランティア

地域交流

教育・研究

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科 3年 出口貴仁

連携先

常陸太田市役所、地域おこし協力隊

顧問教員

蜂屋 大八 准教授（大学教育センター）

※8月末まで

鈴木 敦 教授（人文学部 教授）

※9月以降

参加メンバー

人文学部

人文コミュニケーション学科

岩 瀬 有 紀 2年

櫻 井 佑 香 2年

千 葉 美 香 2年

宮 本 沙 輝 2年

岡 本 萌 3年

久 慈 望 美 3年

白 土 可奈子 3年

森 拓 哉 3年

鈴 木 愛 美 4年

番 場 有 彩 4年

人文学部社会科学科

天 内 ありさ 2年

井 上 紗 希 2年

片 寄 美 紀 2年

住 谷 美 樹 2年

板 垣 里 沙 3年

伊 藤 美保子 3年

工学部

メディア通信学科

江 畑 一 輝

工学部知能システムB学科

佐々木 え り

プロジェクトの申請内容

●プロジェクト概要

人間本来の豊かさ、人と人とのつながりの暖かさがある、それが常陸太田市里美地区である。たくさんの魅力が存在する里美なのだが、過疎化、高齢化といった問題を抱える地域でもあり、その魅力を生かし切れていないのが現状である。そういった現状を打開すべく、立ち上がったのが私達、チーム『さとみ・あい』である。このチーム『さとみ・あい』の中には、3チーム存在し、2012年度から活動をスタートさせていた里美café、里川かぼちゃチーム、そして今年度より発足した里美トラベルチームである。これら3チームを柱とし、特に、「学生という若者の視点を生かしPRする」というコンセプトを軸に、地域住民と密接にかかわり合いながら、里美の特産品を使った商品開発、出店活動、里美のパンフレット作り、などの様々なPR活動を行ってきた。

●目的

茨城県常陸太田市里美地区の魅力のPR
《本年度の目標》

『里美の魅力を多くの人に伝える！！』

去年の活動から得た、里美の魅力を積極的に様々な人に発信していく。そして、魅力を精力的にPRすることで、少しでも里美へ訪れるきっかけを生み出したいと考えており、以下のことを目標とする。

①イベント出店

- ・里美の産品を来場者に提供し、魅力を伝える
- ・来場者に、直接里美の魅力を語る

②パンフレット作成

- ・里美特有のパンフレットを作成し、広報手段として用いる

③里美合宿を開催

- ・実際に里美へ宿泊し、参加者に里美の魅力を感じ、体感してもらう

●期待される成果

本プロジェクトの活動により期待される成果は以下の2点である。

- ①学生が積極的にPRしていくことで、里美の地域活性化につなげる
- ②学生と地域住民といった広い世代間での情報交換の場ができる

地域活性化とは、短期間では目に見える成果というものは、あまり見えてこない部分も多く、こういった活動を継続し、長期的なプランニングをすることで、結果として表れてくるのだろうと考える。

プロジェクトの実施概要

5月	里美訪問
6月	里美訪問（宿泊）
7月	パンフレット作成開始、里美訪

	問 各種MTG
8月	里美合宿（1回目） パンフレット素材集め かわらばん作成開始
9月	ONE DAY CAFÉ開催 かわらばん1号配布 パンフレット原稿完成 里美女子旅ツアー開催
10月	里美合宿（2回目） かわらばん2号配布 パンフレット配布開始
11月	茨城キリスト教大学文化祭出店 茨城大学文化祭出店 里美訪問 かわらばん3号配布
12月	ファーマーズマーケット出店
1月	里美にて活動報告会



「広報用かわらばん」

プロジェクトの成果報告

●今年度得られた成果

◇広報手段の獲得

昨年度の活動より、里美のパンフレットがないことが問題点だと感じ、今年度はパンフレット作成に主眼をおいた。パンフレット作成にあたっては、素材、レイアウトなど細かい部分に気を配り、「里美を日帰りで楽しむ」ということをコンセプトにした。パンフレッ

ト完成後は、イベント出店の際に精力的に配り、特に、パンフレットの内容を口頭で説明することを欠かさずに行った。来場者の中には、パンフレットを参考に、里美を訪れたい、と言ってくれる方もいらっしや、広報媒体の強さは大きいものだ改めて実感した。今後も、パンフレットは改良を加えつつ、PRの手段として使っていきたい。



「里美パンフレット」

◇生の参加者の声を聴く

里美の魅力を伝える大きな手段としては、出店・広報といった2次的なものだけでなく、直接訪れることが何よりも大切であると感じ、実施した。

実施日 10月26～27日（1泊2日）に開催

参加人数 30名

（チームメンバー12名
非チームメンバー12名
茨城キリスト教大学生2名
常磐大学生4名）

この合宿では、里美の魅力を伝えるために、多くの仕掛けを盛り込んだ。

里川かぼちゃの収穫、その他里美産品の収穫、夕飯は全員で自炊、里美散策、宿泊は古民家、地域住民との交流など、里美にある魅力のある数々を可能な限り、実施した。

しかし、ただ実施しただけでは意味がないと

考え、合宿の最後に反省会を行い、率直な意見を参加者（非チームメンバー及び他大学生のみ）にアンケートとして書いてもらい、集計した。

アンケートの質問は以下の通りである。（すべて記述式の質問）

- 1、里美に来て、率直に感じたことはなんですか？
- 2、古民家、カボチャ収穫、里美散策を通してどのようなことを感じましたか？
- 3、もしプロジェクトメンバーなら、どのように里美をPRしていきますか？
- 4、この合宿を通して一番印象に残ったことは？

これより、アンケートの回答（4のみ）の一部を紹介する。

- ・「古民家に泊まり昔の人の暮らしを少し体験できたこと。なかなか体験できることじゃない。」
- ・「かぼちゃの収穫が印象的。農業というものに触れてこなかったのが楽しかった。もし植えるのもできていたらもっと思い入れがあっただろうと思った。」
- ・「高齢者が多く、若者も今回の里美関連の人以外は見る事がなかったという点が一番印象に残った。今の高齢者が里美から消えてしまったら里美はどのようになるのかな？という危機感みたいなことを感じました。」
- ・「食べ物おいしいということだ。お茶は静岡、リンゴは青森、というイメージが強かったが、里美も負けてないな、と思った。里美の他にも、今回は他大学生との交流があるということで、貴重な体験ができたと思う。」
- ・「古民家では夜が寒くて大変だった。いろいろの体験をしたことがなかったので、それはとても素晴らしかった。カボチャの収穫では色の違うカボチャを手でふれ、収穫するという体験ができたのでよかった。管理が大変だと思った。里美散策では昔から言い伝えや田畑の分布について知ることが出来てよかった。車

の量が圧倒的に少ないので人の少なさが目に見えて分かった。そして、祭りが出来ないほど若者が減ってしまっていることに悲しさを覚えた。しかし、里美に人たちの里美のための雰囲気づくりができていて素晴らしいと思った。」

上記のようなアンケート結果より、参加者は里美での合宿を通して、何かしらの魅力を感じてくれたのではないかと、考えられる。また、「他にこういったこともしたかった」、「もっと～をしたかった」といった、1泊2日では物足りないといった回答もあり、こういった意見を来年度に生かしていきたい。

◇イベント出店におけるPR活動

イベント出店は、去年より継続して行ってきた活動ではあるが、今年度はより「PRする」ということに主眼をおいた。もちろん、里美の産品を多く売り、売り上げをあげることも大切だが、そのことにとらわれすぎず、来場者一人ひとりに対して、積極的に自分たちの知る里美の魅力を伝えるように心がけた。イベント出店の回数を重ねるうちに、数としてはまだまだ少ないが、毎回来てくださる来場者もおり、少しずつではあるが、里美の知名度を上げられているのではないかと考えられる。



「茨城キリスト教大学文化祭出店」



「茨城大学文化祭出店」



「味覚際にて出店」

●外部評価

水戸NHK	11月15日	出演
茨城新聞	11月7日	掲載
茨城新聞	9月11日	掲載
茨城大学広報誌「iUP」	vol.3	掲載

●目標達成度合

今年度の目標に対する達成度合を以下のように評価する。

『里美の魅力を多くの人に伝える！！』

達成度 → ○
 成果 → △

上記のような評価をした理由として、PRをすること自体は、活動として多くのことを行ってきたからである。パンフレット作成、イベント出店、里美合宿開催、など、昨年度では実施不可能だと思われていたことを実現できた、そういった意味で○とした。

しかし、成果は△である。地域活性化は長期的なプランで考えていくものであるにしても、もっとPRから里美への訪問客アップへつなげる何かがあってもよかったのではないかと考える。活動を増やした反面、スケジュールに余裕がなくなり、アフターサービスのほうまで手が回らなかったからである。



今後の展望

今年度は、猪突猛進、この四字熟語が似合う1年だった。里美の魅力をPRするあらゆる手段を試し、多くの知見を得ることが出来た。

今後は、PR後の里美への訪問客アップも視野に入れ、計画的に一つ一つの活動をこなしていくことを心がけていきたい。また、より、里美の地域住民との交流を増やし、さらに里美の魅力を知っていきたいと考える。

